

社会性の育成に関する親や教員の意識

——広義の社会性を定義して——

田島 祥*・松尾 由美・坂元 章

A Survey on Parents' and Teachers' Attitudes toward Nurturing Sociality in Children:

Comprehensive Definition of Sociality

TAJIMA Sachi, MATSUO Yumi, and SAKAMOTO Akira

abstract

This paper describes parents' and teachers' attitudes toward nurturing sociality in children. These days, the lack of sociality in children has become a big issue. Some studies argue that this is because children can no longer learn sociality spontaneously at home, in schools, and their local community. In order to resolve this issue, mutual cooperation among these three places is necessary. This study has two objectives: 1) to define sociality more concretely, and 2) to survey parents' and teachers' attitudes towards nurturing sociality in children in order to investigate the process of effective mutual cooperation. First, we assumed that sociality was composed of 12 features. Then, we conducted a series of web survey exercises for parents and teachers. The results were as follows: 1) Both parents and teachers thought that "willingness to comply with the social manners and rules," which was one of components of sociality was most important for children; 2) Parents thought that children can acquire many aspects of sociality at home. In contrast, teachers thought that they can acquire them in school. 3) Parents thought that children can acquire most sociality spontaneously. Meanwhile, teachers thought that children need to receive some training to acquire sociality.

Keywords: sociality, definition of sociality, parent, teacher, Web survey

はじめに

近年、子どもの社会性の低下が繰り返し指摘され、その解決が急務となっている。その背景として、社会性を身につける主要な場である家庭や学校、地域社会での社会性の育成力の低下が指摘されている。例えば高橋(1999)は、現代の子どもたちは、少子化や核家族化の進行などにより、自分と親以外の3人以上からなる関係世界を体験することや、地域社会において異年齢・異世代の人と交流する機会が少なく、社会全体として子どもの社会性を育む力が落ちてきていることを指摘している。また、国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2004)では、学校による社会性育成機能の低下の背景として、地域や家庭の変容と、それに対する学校や教職員の対応の遅れを指摘している。従来、社会性は他者とのかかわりの中で、様々な対人関係を経験することで自

キーワード：社会性、社会性の定義、親、教員、Web調査

*平成18年度生 人間発達科学専攻

然に身につけられてきたが、そうした関係が希薄化した今日、家庭や学校、地域社会に、かつてのような機能の回復を期待することは容易ではない。こうした中で、各場が連携し、相互に補完し合って社会性を育成していくことが必要不可欠であるという提案がなされてきた（e.g., 丸山, 2005; 佐藤, 2004）。しかしながら、こうした連携は十分には進んでいない。千葉市教育センター（1998）が保護者や教員に対して行った調査によると、各場は互いに社会性を育む連携の不足は認識しているものの、連携を図っている様子は見受けられなかった。こうした状況を脱するためには、どのような形で連携していくことが可能であるかを検討し、各場が互いにその役割を認識し、行動に移していくことが重要であるといえる。

ここで、社会性とは何かを考えてみる。社会性ということばはごく日常的に用いられていながら、その意味は必ずしも明確には定義されず、研究者の間でも一致したものはみられない（e.g., 繁多, 1991; 鶴・安藤, 2007）。その中でもしばしば引用されている繁多（1991）では、最も広義の定義としては「その社会が支持する生活習慣、価値規範、行動基準などにそった行動がとれるという全般的な社会的適応性」をいい、最も狭義には「他者との円滑な対人関係を営むことができるという対人関係能力」を指すと述べ、包括的なものとして「個人が自己を確立しつつ、人間社会の中で適応的に生きていくうえで必要な諸特性」と定義している。また、同様なものとして、松永（2004）は「人が自分を確立しつつ、人間関係を形成したり、社会の規範や行動様式を身につけるなど、その個人が生活する社会において、互いに、円滑かつ適応的に生きていく上で必要な諸特性」と定義している。これらに共通することとして、社会性とは、社会を適応的に生きていくために必要な複数の特性から構成されるものであると考えることができる。社会性を育成するにあたり、家庭や学校、地域社会の相互協力を進めるためには、特性ごとに、その内容に適した、よりよい育成方法を模索していくことが必要である。しかし、具体的な特性の内容については、やはり明確には定義されていない。加えて、社会性に関する従来の研究では、主に対人関係能力に限定して社会性が扱われることが多かった。これは、繁多（1991）による狭義の定義に近いものであり、社会性を広く網羅的に扱っているとはいえない。そこで本研究では、第一の目的として、社会性を構成する特性の内容を整理し、定義する。また、第二の目的として、親や教員に対する調査を行い、社会性育成に対する両者の認識を明らかにすることで、家庭と学校の連携のあり方を探っていく。

社会性を構成する特性の定義

社会性を構成する特性を整理し、定義するにあたり、社会性の内容を分類したり、社会性の要素について言及している先行研究の例を挙げる。松永（2004）では、社会性は、「自己形成の要素」「他者とのかかわりに関する要素」「学習集団やより大きな集団・社会に関する要素」の3要素から構成されると論じられている。自己形成に関する要素とは、人間関係を形成したり、社会規範や行動様式を習得する主体として自分を確立する力を指している。具体的には、場に応じて自己主張したり、自己抑制したりできる自己制御能力、他者との関係の中で培われる自他への信頼感や有能感が含まれている。他者とのかかわりに関する要素とは、他者とのかかわりの中で必要な力を指している。具体的には、他者の気持ちや意図、欲求や考えなどを推測する他者理解能力、他者の視点から自他を捉える役割取得能力、他者への共感性や思いやり、他者とのかかわりに必要なコミュニケーションスキル、社会的問題解決能力が含まれている。また、学習集団やより大きな集団・社会に関する要素とは、学校集団や大きな集団や社会で必要とされる力を指している。具体的な要素として、特定の集団内でのルールや社会規範、行動様式の理解、道徳性の発達のことでありと述べられている。

社会性の価値的側面である道徳性は、広義には、対人的な道徳領域、社会的慣習領域、個人領域の3つに分類することができる（首藤, 1995）。また、学校教育において参照される文部科学省の小学校学習指導要領の道徳（平成10年告示）では、その学習内容を①主として自分自身に関すること、②主として他の人とのかかわりに関すること、③主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること、④主として集団や社会とのかかわりに関すること、の4領域に分け、学校の教育活動全体を通して育成すべき道徳の内容を具体的に示している。

社会性の特性をより多様に定義しているものの1つに、「社会性と情動の学習」（SEL: Social and Emotional Learning）がある。これは、米国で発達した社会性育成のための包括的心理教育プログラムであり、SELとは「子どもや大人が対人関係に関するスキル、態度、価値観を発達させる過程」を意味している（小泉,

2005)。ここでは、“対人関係”は相手との相互作用にもとづくものであり、そこには“自己”が不可避免的に関わっていると考えられ、“対人関係”には“自己”の捉え方、自己との関わり方が深く関与していると捉える点に特徴がある。SELでねらいとする能力には、「基礎的な社会的能力」と「応用的な社会的能力」の2つに分けられており、さらに前者は「自己への気づき」「他者への気づき」「自己のコントロール」「対人関係」「責任ある意思決定」の5つの能力から構成され、後者は「生活上の問題防止のスキル」「人生の重大事に対処する能力」「積極的・貢献的な奉仕活動」の3つの能力から構成されている。

このように、先行研究で扱われてきた社会性の具体的内容には、研究間で共通するものと、各研究独自のものがある。本研究では、これらを網羅し、再構成することで、もっとも広義の社会性を構成する12特性を定義した(Table 1参照)。

Table 1. 社会性の12特性

社会性の特性
1. 自分に対する自信
2. 自分をコントロールする力やそのような姿勢
3. 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢
4. 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢
5. 人生の重要事態に対処する力
6. 創意工夫する力やそうしようとする姿勢
7. ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢
8. 周りの人とうまく付き合う力や付き合いようとする姿勢
9. 社会のマナーやルールを守る気持ち
10. 社会の役に立とうとする気持ち
11. 世界の一員としての意識
12. 生命や自然を大切にすること

各特性の内容を具体的に定義すると、「自分に対する自信」とは、自分のよいところや悪いところに気づいたり、自分自身を正しく理解したりして、自分が価値のある存在だと感じられることなどを指している。「自分をコントロールする力やそのような姿勢」は、衝動的に行動するのではなく、よく考えてから行動することや、粘り強く最後まであきらめないこと、必要な場面では我慢することなどを指している。「自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢」は、自分自身で目標を設定したり、問題を発見したりして、自分から行動を起こせること、簡単に他の人に頼らずに自分の力でやりとげること、自分の行動に責任を持つことなどを指している。「生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢」は、基本的な生活習慣を身につけ、正しい食生活やけがや病気の予防に気を配り、健康や安全に気をつけることを指している。ここには、アルコール摂取や喫煙、薬物乱用、性に関する問題なども含まれている。「人生の重要事態に対処する力」は、引越しや就職、進学など、暮らし方や生活環境に変化をもたらしたり、離婚や親しい人との死別、失恋などの人生に大きな影響力を与えたりするものにうまく取り組んでいくことなどを指している。「創意工夫する力やそうしようとする姿勢」は、何事に対しても積極的に新しい考えや方法がないかと考え、よりよい方法について知恵を絞ったりすることを指している。「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」は、ほかの人に対して信頼できると感じ、思いやりをもつことや、相手の立場に立って考えたり、相手の気持ちを理解したりすること、自分とほかの人との違いを尊重し認めることなどを指している。「周りの人とうまく付き合う力や付き合いようとする姿勢」は、周りの人との間に生じた問題を解決することや、みんなをまとめて引っ張っていくこと、周りの人に協力すること、言うべきところで自分の意見や考えをしっかりと伝えること、自分の考えを他の人にうまく伝えることなどを指している。「社会のマナーやルールを守る気持ち」は、順番を守る、うそをつかないなどの集団の中でのルールや、赤信号では渡らないなどの社会の中で決まった約束事やしきたりを守ること、善悪の判断ができること、礼儀正しく行動することなどを指している。「社会の役に立とうとする気持ち」は、人のためになることを

自分から行なうこと、困っている人を助けること、誰に対しても差別などせず公平に接しようとするなどなどを指している。「世界の一員としての意識」は、環境問題などの地球全体の問題や、紛争、飢餓などの世界のどこかで起きている問題、外国の文化などに関心を持ち、地球に暮らす一員として世界中の人と助け合っていこうとする気持ちなどを指している。最後に「生命や自然を大切に作る心」は、自分やほかの人、動物や植物など生きとし生けるもの全ての生命をかけがえのないものとして大切にすること、自然を守ることなどを指している。

社会性育成に関する親や教員の意識調査

本研究の第二の目的は、社会性育成に対する親や教員の認識を明らかにし、家庭と学校の連携のあり方を探っていくことであった。そのために、3歳から18歳の子どもを持つ親と、幼稚園から高等学校までの教員を対象としたWeb調査を実施した。調査対象者を「3歳から18歳の子どもを持つ親と、幼稚園から高等学校までの教員」としたのは、特定の年齢に偏ることなく、広く一般に「大人になるまでの子ども」に対する社会性の育成について考えさせるために、よりその年齢に近い子どもを持つ親や、その年齢の子どもに接している教員を対象者として選抜するためであった。

方法

インターネット調査会社である株式会社クロス・マーケティング（以下、調査会社）を通じ、2006年2月に2度に分けてWeb調査を実施した。まず調査の条件に当てはまる対象者を抽出するためにスクリーニング調査を行い、選抜された対象者に対して本調査を行った。

スクリーニング調査

調査対象者と手続き 調査会社が保有する日本在住の回答モニターのうち、「既婚・子どもあり」と登録していた18歳以上の男女各5,000名と、業種を「教育」または職種を「教師」と登録していた18歳以上の男女各5,000名を対象とした。各モニターに、インターネット上の調査画面のURLを、「生活に関するお伺い」と題した電子メールで送信し、スクリーニング調査を実施した。回答者は9,248名（男性4,537名、女性4,711名）であった。

調査内容 性別や年齢に加え、以下の項目を質問した。①子どもの人数：「0人」「1人」「2人」「3人」「4人以上」の中から、当てはまるものを1つ選択させた。②子どもの年齢：「0～2歳」「幼児、保育園児（3～5歳）」「小学生（1～3年生）」「小学生（4～6年生）」「中学生」「高校生」「それ以上」「子どもはいない」の中から、当てはまるものをすべて選択させた。③職業：「幼稚園教員」「保育士」「小学校教員」「中学校教員」「高等学校教員」「盲・聾・養護学校教員」「その他」の中から、当てはまるものを1つ選択させた。

本調査対象者の絞り込み条件 スクリーニング調査の回答者の中から、次の2つの基準をもとに、本調査対象者となる、3歳から18歳の子どもを持つ親と、幼稚園から高等学校までの教員を抽出した。まず、職業に関する質問で「その他」を選んだ人以外を「教員」として抽出した。また、子どもの人数で「0人」を選んだ人や、「1人」かつ子どもの年齢が「0～2歳」あるいは「それ以上」を選んだ人以外を「3歳から18歳の子どもをもつ親」として抽出した。その結果、3歳から18歳までの子どもを1人以上持つ親642名（男性327名、女性315名）と、幼稚園から高等学校までの教員236名（男性129名、女性107名）を本調査対象者として抽出した。

本調査

スクリーニング調査によって抽出された878名に対し、本調査を実施した。

調査内容 本調査は、次の4つの項目などから構成された。まず設問1では、本研究で定義した社会性の12特性について、特に重要だと思うもの、子どもに必要なと思われるものを6つ選択し、順位をつけさせた。設問2では、各特性について、身につけさせるのが難しいと思うかを4件法でたずねた。その際、親には家庭で身につけさせることについて、教員には学校で身につけさせることについて考えさせた。設問3では、各特性はどこで育てるのが一番いいと思うかを、「学校」「家庭」「それ以外」の中から1つ選択させた。最後に設問4では、各特性を育てるために、特別な教育やトレーニング（市販の教材を使ったり、講演を聞いたり、授業で取り上げ

たりすること)は必要だと思うかを、「特別な教育が必要だと思う：非常にそう思う」「特別な教育が必要だと思う：ややそう思う」「自然に身につくものである：ややそう思う」「自然に身につくものである：非常にそう思う」の4件法でたずねた。

手続き スクリーニング調査と同様に、インターネット上の調査画面のURLを電子メールで送信して回答を求めた。その際、親に対しては、「ご自身のお子さんだけではなく、広く一般に、大人になるまでの間の子どもについてお考えください」と教示し、教員に対しては、「普段ご自身が受け持っていていらっしゃる年代の子どもだけではなく、広く一般に、大人になるまでの間の子どもについてお考えください」と教示した。なお、インターネット上で質問を提示する際には、設問1の社会性の12特性はランダムな順に提示されるよう設計し、設問2以降では、設問1と同様の順序で提示されるよう設計した。また、回収された回答に関して、回答者本人の年齢と子どもの年齢との差に矛盾がある場合などは、回答を無効として除外し、分析には使用しなかった。

本調査では、「幼児・保育園児(3～5歳)」「小学生(1～3年生)」「小学生(4～6年生)」「中学生」「高校生」の子どもを持つ回答者の人数が各100名に達した時点で、また、「幼稚園教員・保育士」「小学校教員」「中学校教員」「高等学校教員」が各25名に達した時点で調査を終了した。盲・聾・養護学校教員は、調査終了時に回収された95名全てを有効回答者とした¹。また、子どもを持つ教員には、教員用の設問が表示されるよう設計されており、親としてではなく、教員の立場からの回答を得た。最終的な回答者数は695名(男性357名、女性338名)であった。

結果

親や教員が考える社会性の各特性の重要度

本研究で定義した社会性の12特性のうち、重要な順に6つまで選択させることで、親や教員はどの特性を特に重要で、子どもに必要なと考えているのかを分析した。各特性を選択した人数の割合をTable 2とTable 3に示す。なお、2位以降は、1位からの累積度数を集計した。

Table 2. 親が考える各特性の重要度(%)

社会性の特性	1位	2位まで	3位まで	4位まで	5位まで	6位まで
1. 自分に対する自信	9.20	8.60	8.13	8.25	8.40	8.63
2. 自分をコントロールする力やそのような姿勢	10.60	10.70	11.80	11.65	11.60	11.00
3. 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢	14.00	13.00	11.40	11.05	11.04	10.40
4. 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢	5.60	5.90	6.40	7.00	6.84	6.83
5. 人生の重要事態に対処する力	3.00	3.00	3.27	3.75	3.84	4.13
6. 創意工夫する力やそうしようとする姿勢	4.20	4.70	5.60	5.90	6.12	6.30
7. ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢	8.60	11.60	12.27	11.80	11.68	11.60
8. 周りの人とうまく付き合う力や付き合いようとする姿勢	4.40	7.10	8.47	9.15	9.40	9.47
9. 社会のマナーやルールを守る気持ち	20.80	18.20	15.87	14.65	13.16	12.60
10. 社会の役に立とうとする気持ち	4.00	4.80	4.87	5.25	5.92	6.53
11. 世界の一員としての意識	2.80	2.50	2.40	2.50	2.96	3.50
12. 生命や自然を大切にすること	12.80	9.90	9.53	9.05	9.04	9.00

Table 3. 教員が考える各特性の重要度(%)

社会性の特性	1位	2位まで	3位まで	4位まで	5位まで	6位まで
1. 自分に対する自信	9.23	9.74	9.06	9.36	8.62	9.15
2. 自分をコントロールする力やそのような姿勢	13.33	12.82	11.97	12.44	11.79	11.71
3. 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢	14.36	13.59	11.97	10.26	9.74	10.00
4. 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢	4.62	4.87	5.47	5.51	7.18	7.09
5. 人生の重要事態に対処する力	1.54	1.54	2.39	2.56	2.46	2.91
6. 創意工夫する力やそうしようとする姿勢	3.08	4.36	5.13	5.51	5.74	5.38
7. ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢	9.74	10.26	11.97	11.92	11.59	11.88
8. 周りの人とうまく付き合う力や付き合いようとする姿勢	6.15	10.77	10.09	9.87	9.64	9.49
9. 社会のマナーやルールを守る気持ち	21.54	17.69	16.24	15.64	14.36	12.74
10. 社会の役に立とうとする気持ち	1.54	2.31	3.76	5.26	6.36	6.92
11. 世界の一員としての意識	0.51	1.54	2.05	2.44	3.08	4.02
12. 生命や自然を大切にすること	14.36	10.51	9.91	9.23	9.44	8.72

Table 2より、親が考えるもっとも重要な社会性の特性は、「社会のマナーやルールを守る気持ち」であり、次いで「自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢」「生命や自然を大切に作る心」が重要だと考えられていた。また、6位までの累積を見ると、全体としては、「社会のマナーやルールを守る気持ち」がもっとも重要だと考えられ、次いで「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」「自分をコントロールする力やそのような姿勢」が重要だと考えられていた。一方で、「世界の一員としての意識」や「人生の重要事態に対処する力」といった特性の重要度は低く考えられていた。また、Table 3より、教員が考える社会性の特性の重要度は、細かい順位は異なるものの、親と同様の傾向を示していた。

社会性の各特性を身につけさせる困難さ

家庭で身につけさせるのが難しい特性 親が考える、家庭で身につけさせるのが難しい社会性の特性について分析した。ここでは、4件法で得られた回答を、「難しい：非常にそう思う」「難しい：ややそう思う」を足し合わせた「難しい群」と、「難しくない：ややそう思う」「難しくない：非常にそう思う」を足し合わせた「難しくない群」の2群に分け、特性ごとに人数の集計を行った。両群の人数の割合と、親と教員の回答を比較した χ^2 検定の結果をTable 4に示す。

Table 4. 親と教員が考える各特性を身につけさせることの困難さ (%)

社会性の特性	親 (N=500)			教員 (N=195)			χ^2 値
	難しくない	難しい	a	難しくない	難しい	a	
1. 自分に対する自信	65.40	34.60	**	66.15	33.85	**	0.04
2. 自分をコントロールする力やそのような姿勢	68.00	32.00	**	53.33	46.67		13.08 **
3. 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢	68.20	31.80	**	60.00	40.00	**	4.20 *
4. 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢	79.00	21.00	**	47.18	52.82		67.73 **
5. 人生の重要事態に対処する力	59.40	40.60	**	35.38	64.62	**	32.46 **
6. 創意工夫する力やそうしようとする姿勢	57.60	42.40	**	67.69	32.31	**	5.98 *
7. ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢	61.00	39.00	**	74.87	25.13	**	11.85 **
8. 周りの人とうまく付き合う力や付き合っていくようにする姿勢	35.40	64.60	**	73.33	26.67	**	81.26 **
9. 社会のマナーやルールを守る気持ち	78.20	21.80	**	68.21	31.79	**	7.55 **
10. 社会の役に立とうとする気持ち	64.40	35.60	**	69.74	30.26	**	1.78
11. 世界の一員としての意識	40.00	60.00	**	62.56	37.44	**	28.73 **
12. 生命や自然を大切に作る心	85.00	15.00	**	66.15	33.85	**	30.81 **

a各群の人数の比率に対して直接確率計算法を用いて有意差の有無を検討した結果を示す。** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4より、親は大部分の特性において家庭で身につけさせるのは難しくないと考えていた。特に、「生命や自然を大切に作る心」「生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢」「社会のマナーやルールを守る気持ち」といった特性は「難しくない群」が圧倒的に多かった。一方、「周りの人とうまく付き合う力や付き合っていくようにする姿勢」「世界の一員としての意識」は、過半数の親が家庭で身につけさせるのは難しいと考えていた。

学校で身につけさせるのが難しい特性 教員が考える、学校で身につけさせるのが困難な社会性の特性について、同様に分析を行った。Table 4より、大部分の特性において、学校での育成は難しくないと考えた教員が多かった。中でも「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」「周りの人とうまく付き合う力や付き合っていくようにする姿勢」などの特性は「難しくない群」が非常に多かった。一方「人生の重要事態に対処する力」は、半数以上の教員が学校で身につけさせるのは難しいと考えていた。

社会性の育成に適した場

親と教員の考える、社会性の各特性の育成に適した場について、「学校」「家庭」「それ以外」の中から1つ選択させた。結果をTable 5に示す。

Table 5. 親と教員が考える社会性育成に適した場 (%)

社会性の特性	親 (N=500)			教員 (N=195)			χ^2 値
	学校	家庭	その他	学校	家庭	その他	
1. 自分に対する自信	32.00	65.60	2.40	38.97	55.90	5.13	7.41 *
2. 自分をコントロールする力やそのような姿勢	26.20	72.00	1.80	33.85	61.54	4.62	9.41 **
3. 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢	32.00	65.60	2.40	52.82	44.10	3.08	27.20 **
4. 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢	19.20	79.40	1.40	18.97	76.92	4.10	4.86 +
5. 人生の重要事態に対処する力	20.40	75.20	4.40	15.90	77.44	6.67	22.69 **
6. 創意工夫する力やそうしようとする姿勢	56.80	40.60	2.60	75.90	21.54	2.56	3.03
7. ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢	60.00	37.80	2.20	63.08	32.82	4.10	3.03
8. 周りの人とうまく付き合う力や付き合っていこうとする姿勢	81.20	16.80	2.00	75.90	20.51	3.59	3.03
9. 社会のマナーやルールを守る気持ち	39.60	57.40	3.00	38.97	53.85	7.18	6.20 *
10. 社会の役に立とうとする気持ち	45.80	48.60	5.60	50.77	40.00	9.23	5.77 +
11. 世界の一員としての意識	67.60	26.00	6.40	65.64	22.56	11.79	5.90 +
12. 生命や自然を大切にすること	22.00	74.40	3.60	31.79	58.46	9.74	20.48 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table 5より、社会性の各特性の育成に適した場について、親と教員の認識は概ね一致していた。具体的には、「自分をコントロールする力やそのような姿勢」「生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢」「人生の重要事態に対処する力」といった特性は、家庭での育成が適していると考えられていた。一方、「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」「周りの人とうまく付き合う力や付き合っていこうとする姿勢」「世界の一員としての意識」といった特性は、学校での育成が適していると考えられていた。また、「社会のマナーやルールを守る気持ち」「社会の役に立とうとする気持ち」は、両者とも家庭と学校とに意見が分かっていた。

特別な教育の必要性

社会性の各特性を育成するために、特別な教育やトレーニングは必要だと思うか、それとも自然に身につくものだと思うかを分析した。ここでは、「特別な教育が必要だと思う：非常にそう思う」「特別な教育が必要だと思う：ややそう思う」を足し合わせた「教育必要派」と、「自然に身につくものである：ややそう思う」「自然に身につくものである：非常にそう思う」を足し合わせた「自然派」の2群に分けて集計した。結果をTable 6に示す。

Table 6. 特別な教育の必要性に関する親と教員の認識 (%)

社会性の特性	親 (N=500)			教員 (N=195)			χ^2 値
	自然に身につく	特別な教育が必要	a	自然に身につく	特別な教育が必要	a	
1. 自分に対する自信	67.40	32.60	**	46.67	53.33	**	25.49 **
2. 自分をコントロールする力やそのような姿勢	61.40	38.60	**	32.82	67.18	**	46.04 **
3. 自分自身で自分のことを決められる力やそのような姿勢	58.80	41.20	**	35.90	64.10	**	29.50 **
4. 生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢	54.60	45.40	**	31.79	68.21	**	29.22 **
5. 人生の重要事態に対処する力	68.80	31.20	**	54.36	45.64	**	12.82 **
6. 創意工夫する力やそうしようとする姿勢	54.60	45.40	**	37.44	62.56	**	16.53 **
7. ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢	74.60	25.40	**	53.33	46.67	**	29.47 **
8. 周りの人とうまく付き合う力や付き合っていこうとする姿勢	58.00	42.00	**	42.05	57.95	**	14.34 **
9. 社会のマナーやルールを守る気持ち	57.80	42.20	**	35.90	64.10	**	26.95 **
10. 社会の役に立とうとする気持ち	59.20	40.80	**	43.08	56.92	**	14.72 **
11. 世界の一員としての意識	33.80	66.20	**	25.64	74.36	**	4.33 *
12. 生命や自然を大切にすること	70.80	29.20	**	52.82	47.18	**	20.14 **

aは各群の人数の比率に対して直接確率計算法を用いて有意差の有無を検討した結果を示す。** $p < .01$, * $p < .05$

Table 6より、親は大部分の特性に対し、特別な教育やトレーニングは必要なく、自然に身につくものであると考えていた。特に、「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」「生命や自然を大切にすること」「人生の重要事態に対処する力」といった特性は、「自然派」が「教育必要派」を大きく上回っていた。一方で、「世界の一員としての意識」は「訓練派」が圧倒的に多く、自然には身につかないと考えられていた。それに対して教員は、大部分の特性を特別な教育が必要だと考えていた。中でも「世界の一員としての意識」や「生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢」「自分をコントロールする力やそのような姿勢」等の特性は、「教育必要派」が「自然派」を大きく上回っていた。一方で、「人生の重要事態に対処する力」「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」「生命や自然を大切にすること」は、「自然派」が「教育必要派」をやや上回っていた。また、特別な教育やトレーニングの必要性について、親と教員との回答を比較するために χ^2 検定を行った。その結果、全ての特性において人数の偏りは有意であり、教員は社会性の諸特性は「特別な教育が必要である」と考える人が多い一方で、親は「自然に身につく」と考える人が多いという違いが見出された（統計値はTable 6参照）。

考察

本研究では、これまで定義が明確ではなく、特に対人関係能力に焦点が集中しがちだった社会性について、それを構成する特性を網羅的に再構成し、定義することを試みた。さらに、親と教員の社会性育成に関する認識を調査した。ここでは、親と教員の回答を比較しつつ結果を考察するとともに、本研究のまとめ及び今後の課題を整理する。

まず社会性の特性の重要度については、重要なものとして挙げられた6位までの累計で見ると、親も教員も同様に「社会のマナーやルールを守る気持ち」「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」「自分をコントロールする力やそのような姿勢」の順で重要だと考えており、「世界の一員としての意識」「人生の重要事態に対処する力」の重要度は低かった。このような違いは、社会性の各特性の身近さが関係していると考えられる。重要度の低かった特性は、地球規模に立った社会性や、人生の重要事態という頻度の多くない出来事に対する社会性であるため、日常的に生じる「社会のマナーやルールを守る気持ち」などの方が、より重要だと考えられているのだといえる。

社会性の各特性の身につけやすさについては、親は大部分の特性は家庭で身につけさせるのは難しくないと考えていた。しかしながら、「周りの人とうまく付き合う力や付き合いっことする姿勢」や「世界の一員としての意識」は、過半数の親が難しいと答えていた。これらの特性は、実際に周りの人との間に生じた問題を解決したり、周りの人に協力したりすることや、地球規模の問題に関心を持ったり、地球に暮らす一員として世界中の人と助け合いっことする気持ちなどが含まれているため、家庭という比較的小さな環境や人間関係の中では身につけさせるのは困難であると判断されたのだと考えられる。一方で教員は、大半の特性は学校で身につけさせるのは難しくないと考えていたものの、「人生の重要事態に対処する力」は難しいと考えていた。この特性は、暮らし方や生活環境、さらには人の生き方に関する変化への対処といった、主に学校外での出来事に関するものであるため、このような判断がなされたのだと考えられる。このように、親と教員は、大部分の特性は、家庭又は学校といったそれぞれの属する場で身につけさせることは難しくないと考えている一方で、一部の特性については、その困難さを認識していた。しかし、親が家庭での育成は難しいと考えていた特性について、教員は学校で身につけさせるのは難しくないと考えており、逆に教員が学校で身につけさせる困難さを感じていた特性について、親は家庭で育成するのは難しくないと考えているなど、社会性の各特性は、家庭か学校のいずれかでは身につけさせることが可能であると考えられていることが示唆された。

社会性の各特性を身につけさせる場については、「自分をコントロールする力やそのような姿勢」「生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする力」「人生の重要事態に対処する力」などの特性は、親からも教員からも家庭で育てるのがよいと考えられており、「ほかの人を信頼したり、理解する力やそうしようとする姿勢」「周りの人とうまく付き合う力や付き合いっことする姿勢」「世界の一員としての意識」といった特性は、学校で育てるのがよいと考えられていた。これらの特性の内容を概観すると、主に自分自身に関することは家庭で、他者とのかわりに関することは学校で育てるのが適すると考えられていることがわかる。また、「社会のマナー

やルールを守る気持ち」や「社会の役に立とうとする気持ち」などの集団や社会との関わりに関する特性では、いずれの場も同程度に重要であると考えられていることが示唆された。このように、社会性を身につけさせる場は、その特性の種類に応じて学校と家庭とに分けられ、それに対する親と教員の認識も概ね一致していた。特に、社会性を身につけさせる困難さに関する回答と合わせて分析すると、親が家庭で身につけさせるのが難しいと考えていた「周りの人とうまく付き合う力や付き合いっことうとする姿勢」や「世界の一員としての意識」は、学校での育成が適切であると考えられていた。同様に、教員が学校で身につけさせるのは難しいと考えていた「人生の重要事態に対処する力」や「生活していく上での問題を防ぐ力や防ごうとする姿勢」は、家庭での育成が適切であると考えられており、各々が苦手とする特性を、互いに補い合って育成することが可能であることが示された。今後は、両者が各場の担う役割を認識し、実際に育成にあたっていくことが必要であるといえる。

社会性の各特性を育てる際の特別な教育やトレーニングの必要性については、「世界の一員としての意識」を除いた全ての特性に対し、特別な教育やトレーニングの必要はなく、自然に身につくものであると考える親が多いのに対し、教員は、自然に身につくと考えられる特性よりも、特別な教育やトレーニングが必要であると考えられる特性の方が多かった。このような認識の違いは、特に家庭での育成が期待される特性について、注意を払うべきである。家庭での社会性の育成力の低下が懸念される中で、こうした特性を本当に自然に身につけさせることができるのかどうかは、慎重になる必要があるだろう。また、特別な教育が必要であるとされた特性については、どのような教育方法が効果的なのかを具体的に検討していくことが、今後の課題として挙げられる。

謝辞

本研究は、財団法人 松下教育研究財団の研究助成を受けて行われました。また、研究の実施にあたり、野原聖子氏にご協力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- 千葉市教育センター (1998). 生きる力を育む学校と家庭の役割に関する研究—子供の社会性の育成をめぐる— 千葉市教育センター
 繁多進 (1991). 社会性の発達とは 繁多進・青柳肇・田島信元・矢沢圭介(編) 社会性の発達心理学 福村出版, 東京 pp. 9-16.
 小泉令三 (2005). 社会性と情動の学習 (SEL) の導入と展開に向けて 福岡教育大学紀要 第4分冊, 54, 113-121.
 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2004). 「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」—「人とのかかわる喜び」をもつ児童生徒に— <www.nier.go.jp/a000110/syakaisei.pdf> (2008年12月19日)
 丸山綱男 (2005). 学校の年度重点目標と社会性育成の課題 高階玲治 (編) シリーズ・学校力4 豊かな心を育てる「社会性育成」力 ぎょうせい, 東京 pp.36-39.
 松永あけみ (2004). 子どもの社会性はどう発達するのか 児童心理, 58(2), 10-15.
 文部科学省 (1998). 小学校学習指導要領
 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b.htm> (2008年12月19日)
 佐藤一子 (2004). いま学校で社会性は育てられるか—地域社会・家庭とのかかわりの中で 児童心理, 58(2), 166-171.
 首藤敏元 (1995). 道徳性と社会性の発達 二宮克美・繁多進(編) たくましい社会性を育てる. 有斐閣. pp.83-98
 高橋ヨシ子 (1999). 子どもの社会性をはぐくむ学校 第二章豊かな人間性や社会性をはぐくむ学校 山極隆・無藤隆(編) 新しい教育課程と学校づくり② 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人 ぎょうせい pp.47-62.
 鶴宏史・安藤忠 (2007) 社会・家族の変化と子どもの社会性発達 福祉臨床学科紀要(4), 61-70.

註

- 1 盲・聾・養護学校 (現在の特別支援学校) 教員については、当初回答数の見積りが困難だったため、他の校種のような回収数の設定を行わなかった。その結果95名の教員からの回答が得られた。いずれも貴重なデータであることから、95名の全回答を有効回答とすることとした。